

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：47701
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：23720183
研究課題名(和文) ロンゴス『ダフニスとクロエ』の文化史的研究

研究課題名(英文) Cultural History of Longus' Daphnis & Chloe

研究代表者

中谷 彩一郎 (NAKATANI, Saiichiro)

鹿児島県立短期大学・文学科・准教授

研究者番号：30527883

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：近現代の文化芸術に大きな影響を与えたロンゴスの古代ギリシア恋愛牧歌小説『ダフニスとクロエ』について、テキストの分析と近現代の欧米と日本における受容という二つの大きな視点から研究をおこなった。まず、テキスト分析に関しては、古典ギリシア語原典の試訳を作成しながら、物語の流れに沿って分析を試みた。つづいて受容研究では『ダフニスとクロエ』の受容史を多角的にとらえるため、文学テキストだけでなく、媒介となった古典ギリシア語の写本や校訂本、各国語による翻訳の考察、さらには美術・音楽への影響にまで視野を広げ、『ダフニスとクロエ』を通して見た文化史研究としてとらえようとした。

研究成果の概要(英文)：Longus' ancient Greek pastoral romance, Daphnis and Chloe had great impact on modern Western (and even Japanese) culture. This study investigates the Greek romance from the standpoints of textual criticism as well as reception history both in Europe and Japan. While making a tentative Japanese translation of Daphnis and Chloe with a substantial running commentary, I also analyse its reception from a broad set of perspectives: mediaeval manuscripts, Greek editions and modern translations, and the influence on literature, arts and music, and try to grasp an overview of the cultural history of Longus' Daphnis and Chloe.

研究分野：西洋古典学

キーワード：ダフニスとクロエ 古代ギリシア恋愛小説 牧歌 受容史 書誌学

1. 研究開始当初の背景

紀元後1～4世紀頃に書かれた古代ギリシア恋愛小説は、西洋古典学研究において長い間見過ごされてきた分野である。紀元前8～4世紀の古代ギリシア文学の主流から大きく外れたローマ帝政下のギリシア語世界で書かれたことや、大筋の似た波瀾万丈の恋物語であることが、かつては低俗なジャンルだという誤った見方を生み出し、研究の停滞を招いた。しかし欧米では過去30年ほどの間に研究が盛んになり、今や主要研究分野の一つとしての地位を獲得したといえる。

また、これらの作品が書かれた、いわゆる第二次ソフィスト思潮と呼ばれる時代も、哲学・歴史・文学の垣根を越えたさまざまな研究分野から注目されており、さらには近代小説の源流となる16、17世紀のヨーロッパの散文物語や、演劇、文学理論に古代ギリシア恋愛小説が与えた影響に関する研究も、欧米ではここ20年ほどの間に注目されるようになってきた。他方、日本では近年ようやく現存する古代ギリシア恋愛小説五作品の翻訳が出そろったものの、本格的な研究はほとんどなかった。

2. 研究の目的

ロンゴスの古代ギリシア恋愛牧歌小説『ダフニスとクロエー』(紀元後2世紀末～3世紀初め頃)は、近現代の文藝全般に大きな影響を与えたテキストである。その影響は文学にとどまらず、音楽(オッフエンバック、ラヴェルなど)や美術(ミレー、マイヨール、ボナール、シャガールなど)に到るまで広範に渡り、欧米だけでなく、日本においても三島由紀夫『潮騒』の藍本になったことはよく知られている。ところが日本では、これまで翻訳こそ多く出ているものの(それぞれ矢野目源一、江口清、呉茂一、川路柳虹、松平千秋による)、本格的な研究はほとんどなかった(申請者が2010年に発表した論文「フィレータースの物語」がほとんど唯一の例外である)。

本研究はそのギャップを埋めるため、『ダフニスとクロエー』のテキスト分析と、そのテキストが歩んで来た近現代の欧米および日本における受容を合わせ、『ダフニスとクロエー』を通して見た文化史研究としてとらえようとするものである。

3. 研究の方法

大きく分けて『ダフニスとクロエー』のテキスト分析と受容研究の二つの柱から成る。関連する西洋古典学および西洋や日本の近代文学関係の研究書・論文の確認は当然だが、特に古い時代の受容研究には稀覯本の調査が欠かせないため、夏にフランス国立図書館(ミッテラン、リシュリュ、アルスナル)や大英図書館などでの調査研究を二年目以降にはおこなった。足りない部分は Gallica (フランス国立図書館の電

子資料サイト)、EEBO (*Early English Books Online*), ECCO (*Eighteenth Century Collection Online*)といった電子テキストデータベースも活用した。また、英国留学時代の恩師で古代ギリシア恋愛小説研究のパイオニアの一人でもあるスウォンジー大学のジョン・モーガン教授とは定期的に意見交換をおこない、研究へのアドバイスを頂いた。

4. 研究成果

(1) テキスト分析

研究の基礎となる古典ギリシア語原典テキストを詳細に読んでいくために、試訳をおこないながら、物語の流れに沿って研究ノートを作り、いわゆるランニング・コメントリ的に分析をおこなっていった。その分析の一端は発表した研究論文や招待講演の中にも反映されている。

(2) 校訂本や翻訳の研究

受容研究では、まずは媒介となる写本や初期の校訂本、翻訳の調査研究が挙げられる。特に最初のフランス語訳者であるジャック・アミヨに時間を割いた。フランス国立図書館所蔵のアミヨ訳の初版(1596年)と死後まもなく出版された1596年版、アミヨが翻訳する際に用いたパリ写本、ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジ図書館所蔵のアミヨ訳第二版(1578年)を調査することができたが、それぞれの訳が完全に同じではないことや、初版の一冊が後に『小説起源論』(1670年)を執筆するピエール＝ダニエル・ユエの旧蔵書であることを確認することができた。また1596年版での改変は17世紀以降の翻訳では踏襲されていないこともわかった。

大英図書館ではアミヨ訳の18世紀以降の変遷を、アミヨ自身が密かに自己検閲した箇所(匿名訳者による追加や挿絵を中心に調査する一方、19世紀のポール＝ルイ・クーリエによるフィレンツェ写本再発見に伴うテキスト欠落部分の補充や改訳、シャルル・ゼヴォールによるフランス語訳の調査もおこなった。また、16～17世紀の希少な英語訳と初期のギリシア語校訂本を比較調査した。同様の作業は古い時代にとどまらず、近年の校訂本や翻訳にまで及んでいる。これらの研究成果の一端は、後述するフランスの劇音楽化作品や日本語訳に関する研究の中でも背景知識、あるいは比較対象として述べられている。

他方、日本語訳の研究として、特に本邦初訳の矢野目源一訳(1925年)の分析をおこなった。この訳は日本においてすら2000年代までほぼその存在自体が忘れ去られていたものを再発見したものである。すでに2008年の第四回国際古代小説学会(リスボン)で発表していた概要を英語論文として改訂する中で("The First Japanese Translation of

Daphnis & Chloe)、底本が翻訳の特徴から、長年にわたるベストセラーのアミヨ＝クリエ訳ではなく、シャルル・ゼヴォール訳(1856)であることを明らかにし、矢野目源一と『ダフニスとクロエ』の関わりを、彼が翻訳しているマルセル・シュウオッフ作品での言及や戦後まもない彼の編集冊子でのカラー挿絵付き紹介など翻訳以外の点からも考察した。欧米の翻訳と比べても類を見ない矢野目訳の大量の自己検閲(伏せ字)については、当時の日本の時代背景も含めて詳細に分析した日本語論文「矢野目源一譯『ダフニスとクロエ』」を別に発表した。自己検閲の理由自体は欧米と共通するものの、矢野目訳の特徴として、性的な連想を引き起こすものであれば、たとえ具体的に描写されていなくても伏せ字になっているため、自己検閲箇所が大幅に増えていることを明らかにした。

(3) 藝術作品への影響

『ダフニスとクロエ』の特に16～18世紀の藝術作品への影響研究のため、パリのルーヴル美術館やロンドンのナショナル・ギャラリー、ウォレス・コレクションで絵画・彫刻化作品の調査をおこなった。特に受容史の中でも初期に当たるルネサンス期の絵画への影響については、ルーヴル美術館とナショナル・ギャラリーが所蔵する題材が『ダフニスとクロエ』の可能性があるとされる作品は、物語内容との具体的な対応などの決め手がなく、他の恋物語の主人公たちと捉えても問題ないと思われるが、ウォレス・コレクションが所蔵するニココ・ピサーノの絵画については、物語場面の一致やフィレンツェで描かれていることなどから、ほぼ『ダフニスとクロエ』で間違いないと思われる。また、ウォレス・コレクション所蔵のフランソワ・ブーシェの作品については、18世紀フランスの田園趣味や『ダフニスとクロエ』の流行を示す証左として、次に述べるオペラ・バレに関する研究論文の中でも言及した。

音楽への影響では、ロンゴスの最初の劇音楽化作品であるジョゼフ・ボダン・ド・ボワモルティエのオペラ・バレ『ダフニスとクロエ』のピエール・ロジョンによる台本に着目して研究をおこなった。日本語論文「ピエール・ロジョン『ダフニスとクロエ』の三種の台本について」では、初演時のボワモルティエの総譜(1747年)に書き込まれた歌詞と再演時に刊行されたロジョンによる台本(1752年)、さらにロジョン作品集(1811年)に掲載されたイタリア人作曲家ベルナルド・メンゴッツィのための大幅な改訂版(1790年代)と、実は三種類の台本があることを初めて指摘し、三者の異同を比較した。特にメンゴッツィ版ではそれまでの貴族社会からフランス革命後への価値観の大きな変化が、身分関係や自由や平等の強調などに顕著に現われている。また、ほぼ同時期に恩師でもあるジョン・モーガン

教授が、偶然にもボワモルティエのオペラ・バレ初演に関する論文を近く刊行することがわかり、出版前の草稿を送っていただき、意見交換できたのも幸いだった。

また、現在執筆中の論考として、ジャン＝ジャック・ルソー晩年の未完のオペラ『ダフニスとクロエ』に関するものがある。ルソーが作曲した歌劇作品の多くはルソー自身が作詞していることが多いが、『ダフニスとクロエ』だけは、友人ギヨーム・オリヴィエ・ド・コランセの手になるため、ルソー全集にも収録されておらず、音楽分野の研究でもルソーによる曲の方が主な研究対象となり、歌詞自体の研究はこれまでほとんどなされてこなかった。そこでむしろその歌詞に着目して、当時の資料を用いながらコランセが作詞するに到った経緯も含め、原作となる『ダフニスとクロエ』(および実際に参照したと考えられるアミヨ訳)と歌詞を比較しながら、文学的側面から分析を試みている。

(4) 文学への影響

文学への影響については、数多くはない先行研究や背景を知るための歴史・文学史関係の資料を読みながら、ヨーロッパにおける全体的な流れを把握すると共に、電子データベースの検索機能などを駆使して、これまでほとんど知られていない作品群の発掘にも力を注いだ。上述した劇音楽の研究も、台本に着目している点では文学への影響ということができるが、他の文学テキストに関する研究成果としては、『ダフニスとクロエ』の影響を受けたことで知られている三島由紀夫『潮騒』(1954年)についての西洋古典学および比較文学の視点からの再検討がある。これまでの日本文学からの研究では、当然のことながら三島に焦点が当たるため、『ダフニスとクロエ』以外の材源に関心が移ったり、近年の西洋古典学における古代ギリシア恋愛小説再評価の現状を踏まえないまま論じられたりしていたため、どうしても不正確な部分があった。そこで、近年の『ダフニスとクロエ』解釈を踏まえて『潮騒』との比較文学的研究をおこなう一方、一般読者への人気と研究者・批評家からの不評という両作品の受容における共通点にも着目して『潮騒』の特徴を考察した。その成果は、'Metamorphosis of *Daphnis and Chloe* in Far East: Yukio Mishima's *The Sound of Waves*(*Shiosai*)'として、2015年秋に刊行予定のジョン・モーガン教授の退職記念論文集に掲載予定である。

また、『潮騒』執筆に際して三島由紀夫が使用した翻訳についても、従来は三島が呉茂一教授の東京大学での授業を受講していたことと『定本 三島由紀夫書誌』(1972年)に呉茂一訳(1948年)しか掲載されていないという理由で、専ら呉訳とされてきたが、実際には呉訳の前年(1947年)に出版されたフランス語訳からの重訳である江口清訳

も所蔵していたことは上述の書誌から明らかであり(著者がロンゴスではなく、訳者名のクウリエの項に分類されているため、先行研究では見落とされてきたのだと思われる)。さらに十代の頃の詩作の師であった川路柳虹も呉訳の翌1949年に、やはりクウリエ訳からの重訳を発表している。このように戦後まもない1940年代後半に三島の周辺で三年連続で『ダフニスとクロエ』の翻訳が出版されていることから、『潮騒』の材源の再検討が必要だと思われる。この研究成果については、2015年10月初めにアメリカ合衆国ヒューストンで開催予定の第五回国際古代小説学会で発表することが決定している。

(5) その他

学会発表のうちプルータルコスに関するシンポジウム報告「プルータルコス『対比列伝』における「比較」と人物描写」は、直接的には『ダフニスとクロエ』と関係がなく、研究分担者として2014年度から別の科研費補助も受けている研究だが(研究課題番号:26370361)、プルータルコスとロンゴスは、ほぼ同時代(紀元後1、2世紀)のローマ帝政下のギリシア語世界の著作家であり、ルネサンス以降のヨーロッパ文藝への影響に大きな役割を果たしたのがどちらもジャック・アミヨによる翻訳である点など共通点も多く、先行する本研究で得た知見が大いに役立った。

研究成果の発表は、日本語と英語半々で国内外にバランスが取れたものとなった。さらに、社会還元ともいえるべき関連する活動として、古代ギリシア恋愛小説に関するコラムの執筆と、これまでのテキスト分析の成果を踏まえた『ダフニスとクロエ』に関する一般向けの講演をおこなった。

当初はテキスト分析と近現代における受容研究を包括的に捉える予定だったが、やや計画が大きすぎた感があり、すべてできたとは言いがたいものの、主に劇音楽化作品の台本と日本における受容(翻訳および文学作品)が中心になった具体的な研究成果では、先行研究では知られていなかった多くの発見に加え、新たな知見を提示することができたのではないかと考えている。

(6) 今後の展望

まず試訳した『ダフニスとクロエ』の訳稿を整えたうえで、テキスト分析の成果を註釈の形で反映して、近い将来刊行できればと考えている。他方、受容研究は際限がないが、現在執筆中の論文も含め研究発表をつづけると共に、『ダフニスとクロエ』の分析と受容史概観を合わせた研究書を出版助成を受けるなどしていずれまとめたい。

さらに、古代ギリシア恋愛小説の中でも最高傑作とされるヘーリオドーロス『エティオピア物語』(4世紀)の受容研究や、古代ギリシア恋愛小説が書かれた第二次ソフィス

ト思潮の時代全体に視野を広げて研究を進展させていきたいと考えている。

最後になるが、広範な資料の収集やヨーロッパの大図書館での稀覯本調査は、科学研究費がなければとても不可能であった。心から感謝したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

(1) Saiichiro NAKATANI, 'The First Japanese Translation of *Daphnis & Chloe*', in Marília P. Futre Pinheiro, David Konstan, Bruce D. MacQueen (eds.), *Cultural Crossroads in the Ancient Novel* (Berlin: De Gruyter, 2015 近刊). 脱稿済(頁数未定). 査読有.

(2) Saiichiro NAKATANI, 'Metamorphosis of *Daphnis and Chloe* in Far East: Yukio Mishima's *The Sound of Waves(Shiosai)*', in Ian Repath & F.-G. Herrmann (eds.), *Festschrift presented to Professor J. R. Morgan on his retirement* (仮)(Groningen: Barkhuis Publishing & Groningen University Library, 2015 近刊). 脱稿済(頁数未定). 査読無.

(3) 中谷彩一郎「矢野目源一譯『ダフニスとクロエ』」鹿児島県立短期大学人文学会論集『人文』38(2014), 9-24. 査読無.

(4) 中谷彩一郎「ピエール・ロジョン『ダフニスとクロエ』の三種の台本について」鹿児島県立短期大学地域研究所『研究年報』45(2013), 53-69. 査読無.

〔学会発表〕(計2件)

(1) Saiichiro NAKATANI, 'The Sound of Waves Revisited', International Conference on the Ancient Novel V, 2015年10月2日(発表決定済)(Houston, アメリカ合衆国)

(2) 中谷彩一郎「プルータルコス『対比列伝』における「比較」と人物描写」第66回日本西洋古典学会シンポジウム「プルータルコスと指導者像」, 2015年6月6日(首都大学東京)

〔その他〕

(1) 招待講演: 中谷彩一郎「ロンゴス『ダフニスとクロエ』」2015年1月24日(文学サロン 月の舟, 鹿児島市)

(2) コラム: 中谷彩一郎「古代ギリシア恋愛小説と地中海世界」地中海学会月報 348(2012), 4.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中谷彩一郎 (NAKATANI SAIICHIRO)
鹿児島県立短期大学・文学科・准教授
研究者番号: 30527883